

明日にむかって

発行/社会福祉法人 陽光会 陽光保育園 編集/陽光保育園「明日にむかって」編集委員会
発行日/2002年12月14日 住所/東京都板橋区大谷口上町23-1 ☎03(3956)1068

40号

近ごろ気になる「保育のマニュアル化」

「保育のマニュアル化」は、経験の浅い保育者でも均一の保育サービスを提供できることを目的として導入されるものなのでしょうが、それと引き換えに、保育者は「言われたことだけをやる」存在になってしまいます。これでは子ども一人ひとりを自分の目で見つめて、自分の心でしっかり理解しようとする姿勢を弱めてしまうのではないのでしょうか? 保育で大切にしなければならないことは、「子ども一人ひとりの願いや思いを受け止めて、その子に合った対応を創り出す」ことにはず。保育者自らの判断で、子どもと豊かなかかわり合いをつくる場を奪ってしまう「保育のマニュアル化」は大きな問題があるのではないのでしょうか? (T・R)

秋の行事から

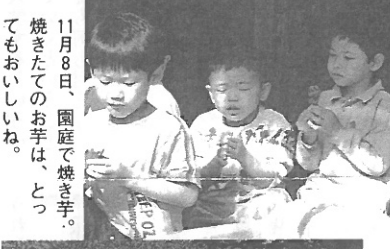
陽光保育園



10月31日、とんぼ組(3歳児クラス)の保育参観。大勢の保護者が参加し、子どもたちといっしょに給食も食べ、おいしい笑顔がいっぱいに。



11月6日、地域の保育園7園の合同運動会(大谷公園)5歳児のみ)に参加。楽しいひと時を過ごしました。



11月8日、園庭で焼き芋。焼きたてのお芋は、とってもおいしいね。



11月14日、竹馬終了式。運動会に向けてかもしか組(5歳児)が取り組んできた竹馬のり。この日は交通公園で乗りおさめ。みんなとっても上手になりました。

今こそ、子どもを守らなければ

福祉改革に歯止めをかける運動を

今年7月、東京都は、「福祉サービス提供主体経営改革に関する提言委員会中間提言」社会福祉法人の経営改革に向けて」という、一度では覚えきれない長いタイトルの「中間提言」を出しました。これがとてもクセモノで、簡単にいえば、社会福祉法人はもういらない、という内容です。陽光保育園も社会福祉法人陽光会の運営する保育園ですが、この「中間提言」が実施されると、職員の大規模削減を余儀なくされる事態におちいります。ということは、子どもたちの環境が破壊されるということでもあり、このままその提言を受け入れるわけにはいきません。とりあえず2003年度実施は見送られたものの、危機的状況に変わりありません。この事態に私たちはどう立ち向かうのか、それが今問われています。



東京都は、2000(平成12)年度から5年間の計画で福祉改革推進プランとして「行政がコントロールする福祉」から利用者指向の「開かれた福祉」への転換を行うと策定しました。これは、企業参入による「市場」をベースに、利用者が自らサービスを「選択」できる福祉、民間企業やNPO(非営利法人)、社会福祉法人など事業者間の「競い合い」によるサービスの向上がある福祉をめざすというものです。七月、福祉局が設置した「都立福祉施設改革推進委員会」「福祉サービス提供主体経営改革に関する提言委員会」が出した報告書と提言は、都立福祉施設の全面撤退と民間福祉施設への人件費補助廃止です。

子どもたちの「今」と「未来」を守るために

秋の夜長、「中間提言」をガンバって読んでみました。どう読んでみても「補助金制度は廃止すべきである」等、東京都の福祉を後退させるような結論が先にあって、そのための理屈(へ理屈?)を後から考えただけでは……と疑ってしまうのは、私がかへそ曲がりだからなのでしょう。

そのなかでも「都の補助は——最小の経費で最大の効果が得られるように」というフレーズがとてつもなく気に入りました。本来(保育に限らず)福祉はお金がかかるもの、かけなければならぬもの。にもかかわらず、目に見える形での「利益」を生み出す要素など何もない。だからこそ、行政がきちんと責任を持つべき分野なのです。経費を節約し、利益を得ることを目的とする民間企業は市場経済の中で大切な役割を果たしています。

子どもたちにとって保育園は生活の場そのものです。毎日事故なく安心して過ごせる場であることは何よりも重要なことですが、それだけでよいはずはありません。当たり前前のことですが、子どもたちはやがて大人になっていきます。豊かな子ども時代を送ることは、子どもたちの今のしあわせだけでなく、大人になってから充実した人生を自ら築き上げていくうえでの大切なエネルギーとなるはずなんです。「最大の効果」なんてすぐには見えてこないのです。目先のコストダウンの発想にとらわれ、子どもたちの今のしあわせだけでなく、未来の可能性まで奪ってしまう……こんな乱暴なことが許されてはなりません。

そのなかでも「都の補助は——最小の経費で最大の効果が得られるように」というフレーズがとてつもなく気に入りました。本来(保育に限らず)福祉はお金がかかるもの、かけなければならぬもの。にもかかわらず、目に見える形での「利益」を生み出す要素など何もない。だからこそ、行政がきちんと責任を持つべき分野なのです。経費を節約し、利益を得ることを目的とする民間企業は市場経済の中で大切な役割を果たしています。

子どもたちにとって保育園は生活の場そのものです。毎日事故なく安心して過ごせる場であることは何よりも重要なことですが、それだけでよいはずはありません。当たり前前のことですが、子どもたちはやがて大人になっていきます。豊かな子ども時代を送ることは、子どもたちの今のしあわせだけでなく、大人になってから充実した人生を自ら築き上げていくうえでの大切なエネルギーとなるはずなんです。「最大の効果」なんてすぐには見えてこないのです。目先のコストダウンの発想にとらわれ、子どもたちの今のしあわせだけでなく、未来の可能性まで奪ってしまう……こんな乱暴なことが許されてはなりません。

あるインディアンの方々は何かを議決する際には、これから決めることが七代先の子孫にどう影響を及ぼすかということを一人ひとりがよく考えてから決めるそうです。「気の遠くなるような話だ……」と思いますが、どんな時代も、どこにいても、子どもは大切にされる権利をもっているということを考えさせられます。

ごあんない

◆陽光保育園卒園式
とき 2003年3月21日(金)
場所 陽光保育園ホール

◆バザーのご協力
ありがとうございます
12月1日(日)、冬のバザーも無事終了しました。今回も皆様のおかげで、予想以上の売上げがありました。この場をかりて、心から感謝申し上げます。

2003(平成15)年度◎園児募集

	定員	在籍	募集
5歳児	18	16~15	2~3
4歳児	18	17~16	1~2
3歳児	15	12~11	3~4
2歳児	12	10	2
1歳児	10	6	4
0歳児	6	0	6
計	79人	61~58人	18~21人

*入園のお申し込み・お問合せは、板橋区児童女性部保育課まで。

*第1次申し込み受け付け期間 2002年11月1日~2003年1月10日
*第1次入園内定発表 2003年2月28日

保育園は

子どもの居場所、大人の居場所

3回にわたって掲載したこの座談会もいよいよ今回で最終回。わが子のこと、親同士のつながり、そして陽光保育園にかける思いなどをたっぷり語っていただきました。



出席者	
中村幸一さん	陽光保育園父母の会会長
中川 守さん	陽光保育園後援会会長
高田 礼子	陽光保育園園長

体験し、感じ、表現するということ

中川 ぼくたちは子どものころ地域のなかで仕事をさせられていました。社務所まで預けられて、廃品回収をしたものをそこに納めたり、お祭りのときは、それぞれ仕事の分担があつて学校から早く帰らされるとか、農繁期は子どもも手伝う、そういう位置づけがありましたね。

中村 ぼくたちも子ども会があつて、子どもの仕事がありましたよ。

高田 地域のなかで、子どももそういう働き手としての位置づけがあつたのが、今はそれがなくなってきたというところはありますね。家庭でも、掃除は掃除機、洗濯は洗濯機とか機械が何でもやってくれて、ごはんだって買ってすぐ食べられるし……。

中川 子どもに仕事があつて、すべてを任せられるっていうのは大変で、何でも話合うわけだけ、それこそ我慢すべきは我慢するしかないから、前頭葉も発達するわけですよ。陽光保育園でもうさぎ組（4歳児）くらいから自分たちで決めさせるわけでしょう。

高田 お店屋さんごっこなんかはとくにそうですね。ハッピーロードとか遊座とか、

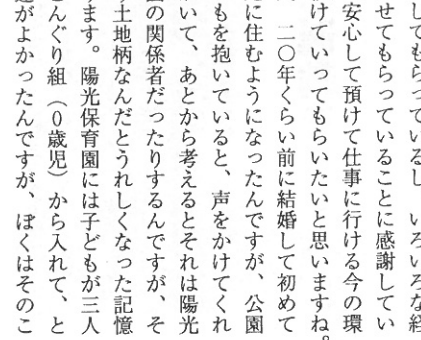
園外保育◆山登りに挑戦!



11月7日(木)、とんぼ組(3歳児)は西高取山越生駅下車へ。先に登った子どもたちは、あとから登ってくるお友達を待ちながら声援を送ります。



11月6日(水)、うさぎ組(4歳児)は天覧山・多摩主山(飯能駅下車)に登りました。山頂での記念撮影は、みんなすがすがしい笑顔です。



11月12日(火)、かもしか組(5歳児)は伊豆ヶ岳(正丸駅下車)へ。険しい山道はロープを伝って。登りきったときの達成感ほまさに言葉に言い表わせないほどです。

高田 ただ、小学校に入學するというのは大きな社会のなかに出ていくということだから、就学間近になつても何も言えないというのは心配なので、保育園ではできるだけ言えるように働きかけていきますね。

自分で考え、行動することの大切さ

高田 自分で決めて自分で最後まで行うということも幼児にとつても大切ですね。たとえば運動会なら、それぞれのクラスで課題を決めるわけですが、できるできないではなくて、それに取り組むまでの気持ちを持っていくというのがすごく大事だと思います。

中川 運動会だと5歳児は竹馬に取り組みますよね。竹馬を練習していると足にメメができてつぶれたりして、ふつうだと親は「かわいそう」なんて言うけれど、そういうときに「ほら、がんばりママができたね」なんて保育士から言われると、「あつ、わたしもやつとママでできたんだ」って思えて、同じことでも全然受け取り方が違ってくるんですね。すごく痛いと思うんだけど、ママができる竹馬も乗れるようになるって言われれば、それががんばる力になるんですね。

うちの長女が5歳児のとき、運動会の練習を朝早く行ってやるっていうのがあつて子どもは「朝練に行くー」なんてはりきっていたけれど、それは若い保育士の勢いみたいなものが子どもにも伝わっていたんですね。一方で、ベテランの保育士ならではのよさもあつて、卒園児を見ていると、その年その年で違いがありますね。共通しているのは、保育士と子どもたちのあいだの信頼感ですね。

ぼくは後援会の会長をするようになって、ずっと卒園式とか見せてもらっているけど、卒園する子どもたちと職員の間が離れていくような卒園式は一度たりともなくて、毎回、信じ合えるというのが伝わってきて

保育園は「子育てのふるさと」

最後に、せっかく父母の会会長と後援会会長に出席していただいたので、陽光保育園に子どもを預けている親、預けている親として、また、それぞれ会長としての立場などからお話しください。

中川 いま父母の会会長として、ぼくのところにいろいろ相談に来る人がいるんです。悩みがあつたり、言いたいんだけど言えないという人で、はたから見ただけだとしたことではないようでも、その人にとっては深刻な問題だったりすることもあります。できれば、そういう人たちと話し合える場をつくれればというのが、ぼくが今思っていることです。そして、話し合うことによつて、なんらかの道が開けていけばいいと思うんです。これは、父母の会会長としてというより、陽光保育園に子どもを預けているひとりの親としてやっていきたいことといつてもいいですね。

保育園への送り迎えはあまりしていないから、そのへんのことにはよくわからないんだけど、娘の七海(現在1歳児)がこのごろ強くなってきたなあというのは感じますね。ぼくの思いとしては、何でも自分でやらせ、やっているあいだは見てあげると、そしてうまくできたらほめてあげる。逆に悪いことをしたときには、悪いと教える。何でも自由にやらせるというのがぼくのスタンスです。もう少し大きくなつても、勉強するしないも自分の選択にまかせ、相談したいときは相談のつてあげる。

子どもが転んだときも、ぼくはじっと見ていて、自分で立ち上がるのを待っているんです。もちろん、危険な場面では助けますけど、親というのは「木の上に立って見る」じゃないけど、そういう育て方をしたいと思っています。

保育園では、子どものいい部分をどんどん伸ばしてもらっているし、いろいろな経験をさせてもらっていることに感謝しています。安心して預けて仕事に行ける今の環境を続けてもらいたいと思いますね。

中川 二〇年くらい前に結婚して初めてこの辺に住むようになったんですが、公園で子どもを抱えていると、声をかけてくれる人がいて、あとから考えるとそれは陽光保育園の関係者だったりするんですが、そういう土地柄なんだとうれしくなつた記憶があります。陽光保育園には子どもが三人ともどろんどろん(0歳児)から入れて、とても運がよかつたんですが、ぼくはそのこ

ろはあまり保育園と関わっていなかつたんです。ただ、いつもどろんどろんで遊んでくると、お散歩は行くし、山登りはするし、いよいよなつて、大卒では陽光保育園の保育に「よし」を出してました。細かいことであれこれ言つたりしたことはないですね。

後援会の会長になって最初に言ったのは、後援会を「子育てのふるさと」として位置づけようということ。それは、子どもが小学校、中学校と行って、わからないことや不安が生じたときに、いちばん大変な時期を共有している親同士のつながりですね。そして次に思ったのが、親も子どもも孤立させないようにしようということでした。

これからは、信頼していくための枠組みを探していこうというのも加わつてくると思います。信頼し合うっていうのは、昔ほどラフにはできなくなつていて、今はそのための枠組みも必要だと思うし、そのための「場」づくりはつとつていこうと思つています。回数は減らさず、たくさんね。

高田 陽光保育園の敷地がもっと広いといいですよ。これは夢なんですけど、たとえば中学生や高校生が集まれる場所とか、お母さんやお父さんたちがちょっとお茶を



「すべての子どもにゆきとどいた保育を11・23大集会」(日比谷野外音楽堂)に陽光保育園からも大勢で参加しました。手にした横断幕には、みんなの思いがこめられています。



自転車にて

朝、七時二十分、「西」との五分の始まりである。とんぼ組から入園し、もう三年近くになるが、自転車の前と後ろの会話の始まりである。「あのバスより早く保育園に行けるかな」「ウン。きつと早く着くとしようよ」「昨日何やった」「リズム。プリツツまくできたよ」「今日は何をやるかな」「うん。わかんない」他愛のない会話である。

しかし、この短い会話の中で三年間の成長がよくわかる。自転車にはもう一人で乗れる。休日には、お互いの自転車に乗って近所を散策する。「お屋敷みたいな家があるね」「ヒマワリきれいだね」「この道はじめて通るね」

「この道に乗って、池袋あたりまで行ってしまつこともある。疲れ果てて、泣きながら自転車をこいで帰ってきたこともある。最近、自分のわかる場所まで戻つてくると、「ここからは一人で帰るからね」と、一人で自転車を飛ばして帰つてく。後をついて行くことあるよ」

「これじゃ、一人で帰ることにならないでしょ」と怒られる。しかし、保育園へはお父さんの自転車の後ろである。あと三ヶ月で、このイスに座ることもほとんどなくなるであろう。短いけれど、楽しい時間をありがと。

十数年後、娘の運転する自動車の助手席に、ドキドキしながら乗るのを楽しみにしている。
(5歳児クラス・苗の父 白石 泰一)

